

はじめに

細井平洲（1728～1801）は江戸時代中期の儒者である。生涯を通じて数多くの詩を制作した。彼の政事指導者や教育家としての活動がよく知られているが、詩人としての活動については、現在のところあまり考察が行われていない。

平洲の門人、小河鼎が撰した「平洲先生墓誌」によれば、「先生所親善者、肥後秋山玉山、長門滝鶴台、勝山木村蓬萊、佐倉渋井太室、本州南宮大湫等、皆一世之名儒、与序齒為兄弟之交」（先生の親善する所の者、肥後（現熊本県）の秋山玉山、長門（現山口県）の滝鶴台、勝山（現福井県）の木村蓬萊、佐倉（現千葉県）の渋井太室、本州の南宮大湫等、皆、一世の名儒なり、与に齒を序し、兄弟の交わりを為す）。明和元年（1764）に刊行された『嚶鳴館詩集』の序文は秋山玉山、滝鶴台、渋井太室、跋文は木村蓬萊が、それぞれ執筆している。この詩集には、この四氏が各詩ごとに寸評と圈点・批点とを付している。こうした文献記録は平洲の交友関係の究明に貴重な手がかりを与えてくれる。平洲の親密な交友の中で、とくに親子ほどに開く年齢差の、二十六歳年上の秋山玉山との忘年の交わり¹を結んだのは美談として語られている。

従来の研究では、平洲の忘年の交わりについて具体的に論じされていない。平洲をより深く理解するための一助になるよう、筆者が2013年発表した「細井平洲と中井竹山の詩文交流」の続きとして、本稿は平洲の詩文をもとに彼と秋山玉山との交友の実態を探りたい。

一、平洲と玉山の略歴

細井平洲は、享保十三年（1728）に、尾張知多郡平島村（現在の愛知県東海市）の農家に生まれた。名は徳民、字は世馨、号は平州または如来山人、通称は甚三郎、別称を紀平洲などと称した。宝暦元年（1751）、江戸に出た。翌年、師の中西淡淵が急逝し、淡淵の門下生は、平洲の下に移った。宝暦三年（1753）、平洲は神田柳原に私塾「嚶鳴館」を開いた。明和元年（1764）、三十七歳の時、米沢藩の藩主上杉鷹山の師となり、桜田邸で講義を開始した。鷹山は、平洲の教えに従い、産業振興、人材育成を積

¹ 忘年の交わりとは年の長幼を心かけず相手の才能学問を尊敬しての交際をいう。中国後漢の末（三世紀初）、禰衡がまだ二十歳にならない時にすでに五十歳を超えた孔融という大先輩と忘年の交わりをしていた故事が有名な典故になっているようだ。

極的に実施し、困窮の極に達していた米沢藩の財政を再建した。明和八年（1771）、第一回の米沢訪問をして、また安永五年（1776）第二回米沢訪問を行い、藩校興讓館の学則を示した。翌年まで滞在し、領内各地で領民に講話を行った。安永九年（1780）、五十三歳のとき、生国尾張藩の儒者となり、藩校明倫堂の督学兼継述館総裁となった。平洲は明倫堂での教授、『群書治要』の校訂などのほか、藩士と庶民の教育にも力を注ぎ、領内各地で講話を行ない、大きな功績を残した。寛政十一年（1799）、藩主徳川宗睦が没した。平洲は「わが事おわれり」と嘆息し、享和元年（1801）六月二十九日、亡くなる。享年七十四歳である。著書に『詩経古伝』『嚶鳴館詩集』、遺著に俗文で書した『嚶鳴館遺草』六巻、漢文で書かれた『嚶鳴館遺稿』十巻、『平洲先生感懐詩』『松島紀行』一巻、和文で書かれた『雄島の苦屋』二巻がある。

平洲は米沢藩の上杉鷹山、尾張藩の徳川宗睦ばかりでなく、四国伊予の松平頼淳（後の紀州徳川治貞）、人吉の相良長寛、大和郡山の柳沢信鴻らの大名にも教育、政事指導をした。また、一般大衆の中に自ら入って、辻講釈を通して町人や農夫にもわかる言葉で彼らを訓育した。平洲は、彼の『嚶鳴館遺草』によって、吉田松陰、二宮尊徳、西郷隆盛らに多大な影響を与えた。内村鑑三の『代表的日本人』の中でも、平洲を「当代最大なる学者」として激賞している。戦前、「修身」を通して上杉鷹山と平洲の師弟関係が語られ、小学生にも知られて、日本教育史に美談を匂わせた。近年、平洲は企業を救う歴史的人物のベスト・テン、財政再建で有名な上杉鷹山の師としてサラリーマンに知られている。

秋山玉山（1702～1763）は豊後（現大分県）鶴崎の生まれである。名は儀また定政、字は子羽、通称は儀右衛門である。玉山は号で、別に青柯と称す。父は肥後細川藩に仕えていた。同じく細川藩の藩医であった叔父秋山需菴の養子になり、秋山姓を名乗った。幼少より学業を好み、才能をあらわしたことは、「府学祭酒玉山先生墓誌銘」²に、「幼穎悟驚人、邑有一老儒、見而奇之曰、後為大儒者、非此兒而誰。」（幼にして穎悟人を驚かす。邑に老儒有り、見て之を奇として曰く、後に大儒と為る者は、此の兒に非ずして誰ぞ。）と記されている。更に長じては、医学修業のため熊本へ出たが、養母が水足屏山の妹である因縁によって、屏山について儒学をも学ぶことになる。

² 武藤巖男編『稿本肥後先哲遺蹟』巻一（普及舎、1894年）、67頁。

享保八年(1723)二十二歳のとき、玉山はその学才を認められて医を廃し、六代藩主細川宣紀の中小姓となる。翌年藩主に従って江戸に遊学し、林鳳岡の門に入った。鳳岡も玉山の才を認め、代講を任せるほどであったという。玉山の学は朱子学を中心に据えながらも、一派に拘泥することなく、当時盛んに行われていた徂徠学を積極的に取り入れるなど、自由な学風を作り出していった。享保十七年(1732)、藩主細川宣紀が亡くなると、玉山はその柩に従って肥後に帰り、多くの子弟を教育した。藩の学問指南役となり、七代宗孝、八代重賢の側近くに仕え、参勤交代の折には必ず供となった。特に明君として名高い重賢との絆は強く、藩政改革において大きな役割を果たした。その主たるものは、玉山が儒学教育の理念を掲げ国家有為の人材育成するプログラムを準備した後、宝暦五(1755)年、他藩にさきがけて藩校時習館の開設に取り組んだのである。また、玉山の撰した学則「時習館学規」は、のちに各藩校の規範となった。藩校教授となってからは、その門より多く逸材が輩出した。玉山は詩文の名声も高く、書画も巧みであり、富士登山を記した文「富嶽記」は人々の広く知るところとなった。「唯我独耽詩」というように詩を好み、亡くなるまで作詩を続け、臨終の間際「清鏡無底、水月似我」と大書して没した。熊本の学問は玉山によって大いに盛んになった。肥後文教の祖といわれる。著作に『玉山先生詩集』『玉山先生遺稿』などがある。

二、往来の漢詩文

平洲が書いた「玉山先生遺稿序」には、「西也魚雁于我、東也杖履于我、間年之歡、不相醉者、有幾于旬、其終別也、一日二来、繾綣異常」(西するや我に魚雁し、東するや我に杖履し、間年の歡、相酔わざる者、旬に幾か有りし。其の終別するや、一日に二たび来たり、繾綣として常に異なれり。)とある。参勤交代で一年おきの楽しみをしていた。玉山が西の熊本藩に帰った一年は、二人は書簡往復で心を語り文を論じ、玉山が江戸にいた間、二人は頻繁な交流をして、ほとんど毎日会っていたようである。「西するや我に魚雁し」とあるように、往復した書簡がたくさんあったはずであるが、実際は、二人の遺稿にはほとんど収録されていない。それは何故か。平洲の門人、樺島公礼が撰した「細井先生行状」からその真相が判明できる。

「細井先生行状」には、「他至諸国君相、凡每与先生語、必屏人移時、書来、先生多火之、窃度於其国機密、先生必有大造矣、然而終身掛口不言、及卒、書札数百通、猶在遺篋、衆議尽返之各主。」（他の諸国の君相に至りては、凡そ、先生と語る毎に、必ず人を屏して、時を移す。書来たれば、先生は多く之を火にし、窃かに其の国の機密を度れば、先生は必ず大いに造すところ有り。然れども、終身、掛口して言われず。卒するに及び、書札数百通、猶お遺篋に在れば、衆議して尽く之を各主に返したり。）³とある。

諸藩の藩主や家老にあつては、そもそも、平洲先生と話をする度毎に、必ず人を遠ざけて長時間に及ばれるのであつた。藩主や家老から書信が来たときには、読んだ後、大部分を火中にしてしまったし、ひそかにその藩の重要秘密事項について考え謀られたのだから、平洲先生は確かに藩に対して大功を成し遂げられたことになるのであつた。しかし、平洲先生は生涯ついに口を固く閉じてその機密に言及されることはなかつた。没後その書簡が数百通まだ手箱に残っていたが、主だった人々が相談しあつて全部差出人に返送したのである。こういうわけで、その詳しいことはもう知るべくもないのである。現在目にすることができる両者の書簡は、わずか『嚶鳴館遺稿』巻之九に収録されている「報秋玉山」「与秋玉山」「又（与秋玉山）」、『玉山先生遺稿』巻之九に収められている「与紀世馨」の四通だけである。

一方、両者が往来した詩文は、平洲の詩集と遺稿に収録されているのが五首ある。その詩文の題を列挙すると、「詠竹為玉山先生五十初度寿」「同秋玉山岡士騏諸君集磯氏分韻」「秋玉山見序拙集賦謝」「哭秋玉山三首」「玉山先生遺稿序」である。また、秋山玉山の詩文も、「紀世馨賦竹、托田生見寄、因和答謝、聞令姪阿爵有神童名、故兼及之」「同平士騏 過飲吳門磯氏宅、是日、紀世馨携令姪阿爵来見」「至日嚶鳴館宴集」「初夏紀世馨嚶鳴館雨集、同滝弥八、井子章賦、世馨有集、托余序文」「嚶鳴館詩集序」などが残っている。

以下では、これらの現存詩文を中心に細井平洲と秋山玉山の交友の実態を考察する。本稿の漢文体詩文の書き出しについては、特に付記、説明しない場合は、小野重仔『嚶鳴館遺稿注釈・文人編』（愛知県東海市教育委員会発行、2008年）を引用する。本文・

³ 小野重仔『嚶鳴館遺稿注釈・初編』（愛知県東海市教育委員会、1998年）、102-104頁。

書き出し文とも、漢字の字体は常用漢字とした。常用漢字以外の漢字、また異体字、俗字は、いずれも常用漢字、正字に改めた。また、本文の書き出し文のかなづかいは、現代かなづかいとした。元号には適宜西暦年を併記した。改元の年は正月からを元年とした。

三、友を求める

平洲の「感懐八首」その四には「館就嚶鳴求友年、締交都是四方賢」（館は就ち嚶鳴、友を求むるの年なりき、締交は都べて是れ四方の賢なりき）⁴と詠じている。「嚶鳴」は『詩経』を出典とすることばであり、小雅「伐木」に「木を伐つこと丁丁たり、鳥鳴くこと嚶嚶たり（伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶）」の二句を、木を切る音に鳥が驚いて鳴き交わす様子によって、友人二人が互いに怠りなく切磋琢磨する様子を喩えている。平洲は江戸での自分の私塾を「嚶鳴館」といい、友を求めることを意味していた。その頃、交わりを結んだ人々は、みな優れた学者であった。

宝暦元年（1751）、平洲は玉山に次の詩を贈り、玉山の五十歳の誕生日を祝いながら、会見を求めた。これをきっかけに、二人の付き合いが始まった。

詠竹為玉山先生五十初度寿

（竹を詠じて玉山先生が五十の初度の寿と為す）

梁園修竹鬱參差	梁園の修竹は鬱として參差たれば
特見孤根碧玉姿	特だ見るのみ 孤根に碧玉の姿あるを
自帶清風餘雨露	自ら清風を帯びて雨露を余し
還含曙日映台池	還って曙日を含みて台池に映じたり
紫花当是青鸞処	紫花は当に是れ青鸞の処るところ
翠実能無彩鳳枝	翠実も能く彩鳳の枝となること無からんや
為説凌霜千載色	為に凌霜に千載の色ありと説けども
歳寒唯向此君知	歳寒にては唯だ此君に向かいて知るのみ ⁵

（『嚶鳴館詩集』 卷之四）

⁴ 『嚶鳴館遺稿』 卷之二、高瀬代次郎編『平洲全集』（東京平洲會蔵版、隆文館、1921年）所収、326頁。

⁵ 『嚶鳴館詩集』 卷之四、高瀬代次郎編、前掲書、246頁。

梁園とは前漢の文帝の子、梁の孝王が築き、客を集めた庭園である。現河南省東部の商丘の東にある。竹が多く、修竹園とも呼ばれた。台は平台で、春秋時代宋の平公によって宋州（現河南省東部の商丘）で建てられた平台をいう。池は阮籍の詠懐詩第十七首に出典する蓬池をさす。

紫は秋山玉山の母国、「筑紫」のことである。筑紫は昔九州の総称であり、主に北九州を指すが、「筑紫」、「豊」、「肥」「熊曾」と分ける場合もある。紫花を桐の花と解することができるが、むしろ筑紫の花と解釈するほうがもっと平洲の本意に近いように思われる。つまり、平洲は筑紫の碩儒と呼ばれる玉山のことを「筑紫の花」と讃えているのである。

鸞は鳳凰の一種で、形は鶏に似て、羽毛は赤色を主として五色があり、声は音楽的に美しいという。このうち、青色の羽毛の多いものを青鸞という。鸞鳳はすぐれた人物や君子などのたとえであると同時に、固く契った夫婦や同志のたとえにも使われている。鸞鳳は地上では荆棘に棲まず、鸞は竹林に、鳳凰は梧桐の木に棲み、また竹の実を食べるといふ。

竹は天に向かってまっすぐに伸び、所々に節があり、幹の中は空洞となっている。そのまっすぐ伸びる姿は純粹で正直な品格、強い節は屈しない節操、空洞は謙虚な精神に喩えられている。年中四季を通して青々として姿を保ち、風雪にあおられても折れることなく悠然と立っているから、不屈な品格と決して腰を折らない節操の象徴とみなされ、草木の中の「四君子」の一つである。したがって、竹は古来より文人高士に好まれている。

この詩は、「梁園の長い竹はうっそうと入り交じっている。その中でただ一本映えており、青々とした竹の姿がとくに目立ち、清らかな容姿を現している。その葉っぱに残っている露の玉が朝日を浴びて、その光が台池に映じている。桐の花は青鸞の棲むところに咲いており、竹の実も美しい鳳凰がとまっている枝についている。霜に負けぬ松に千年ののちまでさめない色がある。寒い季節では、ただこの竹だけがその松の節操を知るのである。」と詠んでいる。平洲は、玉山が自ら徳を修めたうえで、人を益する学徳をたたえて、玉山への敬慕の情を吐露し、交友を求めているのである。

玉山は、平洲の交友を求める詩に答えて、次の返詩で応諾の意を示した。

紀世馨賦竹、托田生見寄、因和答謝、聞令姪阿爵有神童名、故兼及之

(紀世馨、竹を賦し、田生に托して寄せらる。因りて和答して謝す。聞く、令姪、阿爵は神童の名有りと。故に兼ねて之に及ぶ)

聞君思我払瑶琴	聞く、君、我を思いて瑶琴を払うと
何日相逢入竹林	何れの日にか相逢いて竹林に入らん
瀟洒原知堪把臂	瀟洒なれば 原知 臂を把るに堪えたりと
清虚況復欲論心	清虚にして況んや復た心を論ぜんと欲するをや
新詩自似琅玕色	新 詩は自らを琅玕の色に似て
長嘯還同鸞鳳音	長嘯は還た鸞鳳の音に同じたり
不啻風流青眼好	啻に風流のみならずして青眼も好ければ
兼伝小爵既繁陰	兼ねて伝えよ 小爵も既に繁陰すべしと ⁶

(『玉山先生詩集』卷之三)

詩の題から分かるように、平洲は友人の熊本藩士、磯田生を通じて秋山玉山を知り合ったのである。琅玕とは、暗緑色または青碧色の半透明の硬玉である。玉山は平洲の詩を琅玕に譬え称美している。「青眼」の出典は中国の歴史書「晋書」であり、晋の阮籍という人が、好感のもてる人は青眼で迎え、嫌な人は白眼で迎えたということから、「青眼」は、親しい人が訪れたとき、喜んで迎える目つきのことを表す。玉山はこの「青眼」の典故になぞらえて、平洲の交友の申し出を応諾する意を告げる。

この詩には、玉山が才ある後輩の平洲を意識し、心あたたまる優しさに満ちている。とくに「論心」の語は、詩文の交流だけにもかかわらず二人が意気投合していることがうかがわれる。

四、平洲と玉山との初会見

宝暦元年(1751)六月十三日、平洲は磯田生の家で玉山と劇的な出会いをした。その詳細は、平洲が書いた「玉山先生遺稿序」に載っている上野伯修のことばからうかがわれる。

「玉山先生遺稿序」の冒頭には、次のように言っている。

「熊府野君伯修至、出此集於懷、愀然属余曰、是子之故人秋玉山遺編也、欲図之

⁶ 武藤巖男等編『肥後文献叢書』(東京隆文館蔵版、1910年)所収、387頁。

梓、子請叙之、子其記与、昔者秋子会子于吳門磯氏、神之一接、目撃交定、杯酌之盟、吾亦与觀焉。」（熊府、野君、伯修至り、此の集を懐より出だし、愀然として余に属して曰わく、「是、子の故人秋玉山が遺編なり。之が梓を囚らんと欲す。子に請う、之に叙せよ。子、其れ記するか、昔者、秋子、子に吳門磯氏に会し、神の一たび接するや、目撃交ごも定まりて、杯酌に之れ盟いしを。吾も亦た与り觀たり。」⁷

つまり、熊本藩の上野伯修がやって来て、玉山の遺稿集を懐中から取り出して、悲しげに平洲に手渡して次のように言った。「これは貴兄の友人、秋山玉山先生の遺稿集です。これを上梓しようと思っています。貴兄にお願いします、序文を書いてください。貴兄は覚えていらっしゃるでしょうか。以前、秋山先生が貴兄に吳服橋の磯氏のところでお会いになったその時、お二人の心と心とがぶつかり合い、目と目とがはじき合い、やがて落ち着くや、さかずきを酌み交わして親交を誓い合われたことを。私、吉右衛門も同席していて親しく目にいたしました。」と、上野伯修は、一瞬に心と心との触れ合う、平洲と玉山の壮絶な出会いの思い出を述べている。

『莊子』「田子方」には、「仲尼曰、若夫人者、目撃而道存矣。」（仲尼曰わく、かの人のごとき者は、目撃して道存す。）とある。孔子が賢者に会ったときの印象を述べた。孔子ほどの人なら、一目見ただけで相手が道の体得者と分かる、ということである。上野伯修は、この故事にならい、「神の一たび接するや、目撃交ごも定まる」をもって、平洲と玉山が初対面した瞬時に、その意気投合、また以心伝心で互いに真心を伝えるような劇的な逆り出をなみなみと発露している。

当日の宴会の席上で、玉山は次の詩を吟じた。

同平士騏⁸過飲吳門磯氏宅、是日、紀世馨携令姪阿爵来見

（平士騏と共に吳門磯氏宅に過飲す、是の日、紀世馨は令姪阿爵を携えて来見す）

銜杯此地興堪賒	杯を此の地に銜みて興は賒るに堪えたれば
潦倒休嘲鬢有華	潦倒すといえども嘲を休めよ 鬢に華有りと
燕市荊卿還我侶	燕市の荊卿は還た我が侶にして

⁷ 小野重仔『嚶鳴館遺稿注釈・文人編』（愛知県東海市教育委員会、2008年）、103頁。

⁸ 平士騏は片岡朱陵のことである。片岡朱陵は、名を維良、通称を善次郎、字を子騏、号を朱陵といい、本姓は平尾氏なので、平士騏という呼び名もある。熊本藩士藪家に仕えていた。重賢公の封を襲うや、抜擢されて侍講となる。

吳門梅尉近君家　　吳門の梅尉は君が家に近し
 樽前不到紅塵色　　樽前に到らず　紅塵の色
 竹裏何知白日斜　　竹裏に何ぞ知らん　白日の斜めなるを
 況為風流逢二阮　　況んや風流　二阮に逢うを為すを
 玄譚疑是在煙霞　　玄譚して疑うらくは是れ煙霞に在るかと⁹

（『玉山先生詩集』卷之三）

燕市荊卿とは、燕の市にいるときの荊軻のことをさす。荊軻が燕に入り、高漸離という人と親しくつきあった。高漸離は弦楽器の筑を良く奏でる名手である。荊軻が燕の市に行っては市中で酒を飲んで、高漸離の筑にあわせて歌い楽しみ、ところかまわず泣いたりした。

吳門とは吳服橋御門である。『御府内備考』に「和田倉御門より東北の方にて、御堀の水道三河岸の入堀に注ぐ」とある道三堀を東進し北町奉行所の前を通り、隣接する熊本藩上屋敷を通過して「吳服町へ出る御門」を吳服橋御門と称した。熊本藩士の磯氏の宅はその奉行所の近くにある¹⁰。梅尉は北町奉行所をいう。二阮は西晋の阮籍、阮咸¹¹のことであり、平洲は小河爵を連れて会見に臨んだので、玉山は阮籍と甥の阮咸とを大阮、小阮と称した故事にならって、平洲と小河爵二人と称した。玄譚は玄談や学問論議のこと、煙霞は仙界をいう。

この詩は、「こちら吳氏のお宅でおいしいお酒とお料理をいただく。両鬢が白髪まじりの私の老衰をあざけらないでほしい。荊軻と高漸離との付き合いのように、私は友人の歌にあわせて歌い楽しむ。北町奉行所にある吳氏のお宅は君の家から近い。俗世間を離れて杯を交わした。賢者がいる竹林の中において、夕日の来るのに気づかない。まして竹林七賢の阮籍、阮咸のような賢者に逢うことができ、また、学問論議をして、まるで仙界に身を置くような気持ちだ。」と吟じている。

平洲も玉山の詩の韻に合わせ、次の詩を披露した。

同秋玉山岡士騏諸君集磯氏分韻

（秋玉山、岡士騏諸君と共に磯氏に集まる分韻）

⁹ 武藤徹男等編、前掲書、386頁。

¹⁰ 小野重仔、前掲書、105頁。

¹¹ 阮籍は竹林の七賢の一人である。甥の阮咸も竹林の七賢の一人であり、竹林の七賢の中では王戎について二番目に年少である。

五斗醇膠率意賒　　五斗の醇膠もて率意に賒しども
盛筵非是事豪華　　盛筵は是れ豪華を事とするのみに非ず
人元益者憐三友　　人は元もと益者として三友を憐
客自能文見一家　　客は自ら能文にして一家を見わす
坐久操琴秋葉振　　坐すること久しくして琴を操れば秋葉は振るい
歌闌倚檻片雲斜　　歌うこと闌にして檻に倚れば片雲は斜めなり
同襟此興難常得　　同襟なれども此の興は常には得ること難ければ
何恪彩毫映晚霞　　何ぞ恪しまん　彩毫の晚霞を映すを¹²

(『嚶鳴館詩集』卷之四)

三友は『論語』の季氏篇に見える三種類の友をさす。三益友は直（直言する）、諒（思いやりがある）、多聞（見聞が広い）の友である。詩には、「みんなはおいしいお酒をいただき、盛大な宴会を存分に楽しむ。人はもともと三益友を憐れむ。玉山先生は文に長けて、一家学問を成す。秋の木の葉は琴の音に包まれ、揺れている。ちぎれ雲がかかっている夕日の下で、欄干に寄りかかり歌を歌っている。親友とともに、このような興を楽しむのは稀なことだ。思いのまま筆を走らせ作り上がった巧みな詩文が夕焼けと互いに引き立て合って風情を添える。」と詠じている。

上述の玉山の詩と平洲の詩には、同じ韻字、「賒」「華」「家」「斜」「霞」が使われている。同じ韻字を使うことは同じ志を意味するのである。それは、お互いの息の合わせぶりや親愛の情をたっぷり見せてくれる。

五、至日の宴

至日の宴とは宝暦二年（1752）より文化十三年（1816）に至り、六十五年間も続き、毎年冬至の日、嚶鳴館で行われた宴会である。宝暦五年（1755）の至日の宴会には、玉山が参加して、席上では次の詩を詠んだ。

至日嚶鳴館宴集（至日、嚶鳴館の宴集）
司天台下草玄亭　　司天台下　草玄亭にて
促席争傾白玉餅　　席を促しつつ争いて傾けたり白玉餅を

¹² 高瀬代次郎編、前掲書、247頁。

仙律吹灰逢至日　　仙律に灰を吹きたり至日に逢えば
 鳥声求友響間庭　　鳥声は友を求めて間庭に響きたり
 不縁太史觀雲物　　太史の雲物を観るに縁らずして
 那識同人聚瑞星　　那んぞ同人の瑞星に聚まるを識らんや
 休道交驩非ト夜　　道うを休めよ　交驩はト夜に非ずと
 灯前相見眼愈青　　灯前に相見みえて眼は愈いよ青ければなり¹³

(『玉山先生遺稿』卷之三)

揚雄が『太玄』を著したために、後世の人が彼の故居を「草玄亭」という。ここでは、佐久間町天文台近くにある平洲の嚶鳴館をさす。白玉とは寛永十四年(1637)に創業された酒造りの「笠置屋」が出された酒銘「玉の泉」にちなみ、また、大阪の能勢では寒天・米・酒を三白と呼んでいるように、白玉餅はお酒を酌む杯をさすと思われる。「席を促しつつ争いて傾けたり白玉餅を」は、席をつき合わせて座って、杯を傾け酒を飲むというのである。

昔、「候気の法」、別名「葭灰の法」がある。それは、一年十二ヶ月の節気に従った律呂を検証する方法である。その由来は次のようである。中国の黄帝が伶倫に命じて、大夏の西側、崑崙山の北側にある、嶰谷の竹から、自然に円く、内部が空洞で、その上下の孔の周囲の厚みが均一なものを選ばせ、二つの節の間を切って吹き、それを黄鍾の宮とした。さらに十二個の笛(律管)を作って、鳳凰の鳴き声を手本とし、雄の声六つと雌の声六つを選び、雄の六つは陽であり律になり、雌の六つは陰であり呂になり、六律六呂を十二律呂と呼ぶようになった。言い換えれば、十二律呂に従った十二本の律管を方位別に地面に埋めて、これとともに二十四節候の変化を検証する方法である。その観測技法としては、三重の部屋を作り、扉は閉じ、壁の隙間をしっかりと塗り固め、室内に赤い絹布を敷く。木で机を作り、律管ごとに机を一脚とし、内側を低く、外側を高く、方位に従って並べる。律管をその上に置き、葦を焼いた灰を管の一端に詰め、絹布で管を覆う。暦を参照してこれを観察する。気が到来すると灰が吹かれて布が動く。冬至の日には、黄鍾という律管の灰が吹き散らされるのである。杜甫の七言律詩「小至」には「吹葭六管動飛灰」(吹葭の六管　飛灰を動かす)の句

¹³ 武藤巖男等編、前掲書、427頁。

があり、また韓愈の「憶昨行和張十一」（憶昨行、張十一に和す）には「憶昨夾鐘之呂初吹灰」（憶ふ昨に夾鐘の呂の初めて灰を吹きし）がある。冬至の日は「陰極まりて陽初めて至る。日南に至り、漸く長く至るなり。」とあるように、太陽が最も南に来るので、一年で最も日が短く、これから日が長くなる。玉山はこの典故を踏まえて、めでたい瑞兆の日に催される宴会の賑やかな雰囲気述べている。

太史は、天文・暦算・記録などを掌る官である。瑞星はまた景星ともいう。めでたいことの前兆として出るといわれる星である。「太史の雲物を観るに縁らずして那んぞ同人の瑞星に聚まるを識らんや」とは、まさに「太史ありて瑞星あり」のことであろう。

同人は『易経』六十四卦の第十三番目の卦で、通称「天火同人」である。「天と火とは同人なり。君子以て族を類し、物を弁ず。」同人は「人を同じくす」であり、同は会同・協同の意味である。志通う者を集め、進歩向上を目指す。天も火も進歩向上、たゆみない前進を目指すものの象徴として、正々堂々と公明正大に、志を同じくしている皆と仲良くして進む。

ト夜はト昼ト夜のこと。『春秋左氏伝』莊公二十二年に、「公に酒を飲ましむ。樂しむ。桓公曰く、火を以て之に繼げ、と。辞して曰く、臣は其の昼をトし、未だ其の夜をトせず」とある。桓公は「あかりをともして夜も飲み続けよう。」という、臣の敬仲は「わたしは昼のことを占って吉とでたので酒宴を開きましたが、夜のことまでは占っていません」と答えた。ここでは、気心の知れた友人は夜は飲まぬ意をさす。

「青眼」とは、前述のように阮籍が俗物を白眼し、自身の気に入った人物には青眼で応対したというが、ここでは、玉山は阮籍が礼俗の士を憎んだということを閉却し、平洲が世俗を超越した俊賢であるという評価を与えている。

玉山は「天火同人」の思想を受け継ぎ、巧みに首聯の「司天台下」を「天」に、尾聯の「灯前」を「火」になぞらえ、また頸聯の「那んぞ同人の瑞星に聚まるを識らんや」に「同人」の精神を採り入れて、志を同じくしている皆と仲良くして進むという意気地を遺憾なく表現している。この詩は巧妙な詩作といえよう。

宴会の翌日、秋山玉山は平洲に書簡を送った。宴会の当日、玉山は先約があったから、宴会に遅れた。平洲の家へ行く途中、片岡朱陵と渋井太室の帰ってくるのに出会った。心が浮き浮きして、二人を連れて行った。書簡には「足下欣然烹鷄命酒、月下

復飲、頗作少陵氏書堂、邀李尚書之態、豈不謂風流好客之篤乎、迺不佞、連飲大白、轟飲自罰、醉墨縱橫、狼藉盈紙、其貽嘲時彦、亦所敢不辭也。」（足下、欣然として鶏を烹、湑を命じて、月下に復た飲み、頗る少陵氏が書堂を作し、李尚書の態を邀へたり。豈に風流にして客を好むの篤きと謂はざらんや。迺ち不佞、大白を連飲し、轟飲して自を罰し、醉墨を縦横にし、狼藉、紙に盈ちたり。其の貽れるを時彦に嘲らるるも、亦た敢へて辞せざる所なり。）¹⁴とあるように、玉山は自身の豪快な飲みっぷり、酔って筆を走らせたことをありのまま述べている。

『嚶鳴館遺稿』卷之九には平洲の玉山宛の書牘三通、「報秋玉山」「又（与秋玉山）」「与秋玉山」が収められている。「報秋玉山」（秋玉山に報ず）は宝暦五年（1755）の至日、すなわち冬至の宴会の翌日（十一月二十一日）に発送された礼状である。その断定の根拠は、宴会出席者の詩や手紙を総合して考えてみるに、その日は(1)小川爵の健在期間中でなければならぬ。(2)平洲塾の神田柳原進出が宝暦三～四年だから、それ以後でなければならぬ。(3)前二項を満足する玉山出席可能年は、宝暦三年、五年であること。(4)その日の月の出の時間は宝暦五年の至日のそれと思われること。(5)玉山に伴われて参加した千葉芸閣の玉山入門が宝暦五年であったこと等による¹⁵。

この「報秋玉山」書簡には、前の玉山の書簡と対応して、次のように言っている。

「楽哉、小楼至日之飲、壯哉、秋翁至日之飲。促席乎岡子、大杯互罰、飲將斗、高談卓然、翁甚似焦遂、豈亦飲中之仙耶、井子吹笛、葉生梵咒、合座聳聽、不弁龍牛之鳴、可笑、蓋得趣以賦、動句驚人、而後醉墨溢紙、雲飛煙散」（楽しきかな、小楼が至日の飲、壯なるかな、秋翁が至日の飲。席を岡子に促して、大杯互に罰す。飲むこと將に斗ならんとして、高談の卓然たること、翁は甚だ焦遂に似たり。豈に亦た飲中の仙ならんか。井子は笛を吹き、葉生は梵咒し、合座して聳聽すれども、龍牛の鳴を弁せず、笑うべし。蓋し趣を得て以て賦し、句に動けば人を驚かし、而うして後に醉墨は紙に溢れ、雲飛し煙散す）¹⁶。

岡子は片岡朱陵、井子は渋井大室、葉生は玉山の門生、千葉芸閣である。焦遂は杜甫の「飲中八仙歌」に見られる八人の酒仙の一人である。この礼状には、酒仙焦遂に

¹⁴ 『玉山先生遺稿』卷之九、武藤巖男等編、前掲書、489-490頁。

¹⁵ 小野重仔、前掲書、113-114頁。

¹⁶ 高瀬代次郎編、前掲書、485頁。

比定された玉山の高談雄弁のさま、親友諸兄の飲みぶりを記している。書簡から当時の雰囲気が見られる。宴会の一興は、渋井太室は笛を吹き、千葉芸閣は陀羅尼の呪文を唱えたのである。玉山は、興がわいてきて、即席で詩に歌い、一句に写し得られれば人に目を見張らせ、そうした後で、酔いに任せて揮毫した。平洲の交友はかかる自由で享樂的な雰囲気裡に展開された。

それから、平洲は前書簡を出して間もなく、もう一通の書簡「又（与秋玉山）」（又た秋玉山に与う）を玉山に出した。書簡では、至日の宴会の「三常」の楽しみを述べている。「常」とは普通のことを意味する。

第一の「常」は、「古人所謂食菽飲水、即小館開宴之常已。」（古人の所謂菽を食し水を飲むは、即ち小館が開宴の常なるのみ。）である。豆がゆをすすり、水を飲むだけというような粗末な接待で親友たちには喜んでもらうのが嚶鳴館至日の宴会の普通なのである。

第二の「常」は、「罄之飲以永日、使僕無遺憾者、素二三君子集于小館之常已。」（之が飲を罄くすに永日を以て、僕をして遺憾無からしむる者は、素より二三の君子の小館に集うの常なるのみ。）ということである。集いの喜びを味わい尽くしつつ、気兼ねなく一日を過ごすことができるのは、何人か学徳の充実した方々がお集まりくださるからである。これもまた嚶鳴館にとって普通のことである。

第三の「常」は、「一献一醕、遂至大醉如泥、不知賓之斯帰、坐欠之敬送、以得罪於長者、抑亦僕之常也。」（一献一醕、遂に大酔泥の如くに至り、賓の斯に帰るを知らず、坐して之が敬送を欠き、以て罪を長者に得るも、抑そも亦た僕の常なり。）をさす。賓客と酒杯をやりとりして、そのあげく、泥酔してしまい、賓客の帰りも知らず見送りもできなかった。尊敬すべき方々の鬻蹙を買ってしまうのも私のもともとの普通なのである。こうして平洲の客好きで、快闊豪邁な性格、彼自身の飲み方を伝えてくれた。また、平洲の青年の客気がうかがわれる。

第三通の「与秋玉山」（秋玉山に与う）は、宝暦六年（1756）春、平洲が書いた書簡である。玉山は、宝暦五年（1755）七月十八日に江戸の藩邸を出発し、七月二十二日に富士山に登頂し、八月二日に藩邸に帰着した。その後、紀行文「富嶽記」を書いた。平洲が玉山の「富嶽記」を借りて読んだ後の感想はこの書簡に述べている。字句のすばらしさを賞賛して、また、玉山と思しい仙人と空中を舞い、風に任せてもやの

中を登っていくような夢に仮託して、玉山の文章のすばらしさをたたえている。

六、送別の宴

宝暦十二年（1762）五月下旬ごろ、秋山玉山が藩主細川重賢に随行し熊本に帰る直前、嚶鳴館においては玉山の帰国送別会が開かれた。他の友人の滝鶴台、渋井太室も出席し、交歓した。席上、平洲は玉山、滝鶴台、渋井太室に『嚶鳴館詩集』の稿本を渡し、序文を依頼した。玉山はこの日の宴席に次の詩を残した。

初夏紀世馨嚶鳴館雨集、同滝弥八、井子章賦、世馨有集、托余序文

（初夏、紀世馨が嚶鳴館に雨集し、滝弥八、井子章と共に賦す。世馨集有り、余に序文を托す）

春尽年芳静	春は尽くれども年芳静かなり
霏霏雨似絲	霏霏として雨ふる糸の似し
残花悲白髮	残花に白髪を悲しみ
佳木変黄驪	佳木に黄驪は変る
裁序慚玄宴	序を裁するは玄宴に慚じ
知音託子期	知音は子期に託さん
但教幽履在	但だ幽履をして在らしむるのみれば
潦倒不須辭	潦倒もて辞を須ひざれ ¹⁷

（『玉山先生遺稿』巻之二）

雨集は多く集まる。年芳は春の美しい花をさす。玄宴は三都賦に序した晋の玄宴先生、皇甫謐（215-282）のことである。左思の作品「三都の賦」が名士の皇甫謐に序文を書いてもらったことで、有名になった。「子期」は春秋時代、楚の鐘子期のことで、琴の名手伯牙が琴を弾くと、鐘子期は伯牙の気持ちを真に理解してくれるという。ここでは、鐘子期の「知音」の故事を引いて、玉山は自身を子期に比し、平洲を伯牙に比している。玉山は自身だけが平洲の気持ちをよく理解していることとて、老衰にしても序文の依頼を断るわけがないというのである。

宝暦十二年（1762）五月二十二日、玉山は江戸をたち、熊本に向かった。玉山の「嚶

¹⁷ 武藤巖男等編、前掲書、419頁。

鳴館詩集序」に言っているように、

壬午夏、余將歸藩、世馨徵余序其詩、唯歌驪駒者在門、予不能卒酬其意、取置之行笥中、既上途、歷岐蘇、涉紫海、其間三千余里、皆世馨足跡所遍、則其詩存焉。余在舟車中、時々展玩不積、則余睹其草木泉石、欣々色動、与行笥中詩卷益相映發也、迺足驗世馨詩有神助哉。

(壬午の夏、余將に藩に帰らんとす。世馨余に其の詩に序せじことを徵す。唯だ驪駒を歌ふ者門に在り、予卒かに其の意に酬う能はず、取りて之を行笥の中に置く。既に途に上り、岐蘇を歴、紫海を渉る。其の間三千余里、皆世馨の足跡の遍き所、則ち其の詩存す焉。余舟車の中に在り、時々展玩して積かず。則ち余其の草木泉石、欣々として色動き、行笥中の詩卷と相映發するを睹る。世馨が詩の神助有ることを驗するに足れり。) ¹⁸ (『玉山先生遺稿』卷之六)

壬午は宝暦十二年(1762)である。この旅中、秋山玉山は平洲の詩稿を携え、時々それを読みながら、中仙道から木曾路、東海道に出て、山陽道から筑紫を経て旅を続けた。この道はかつて平洲の通ったところ、秋山玉山は詩を読み風景と相応ずるのを見て、舟の中に宿屋に平洲の詩を品評したのであった。六月二十一日に熊本に到着した頃には、詩の品定めもすべて終わっていた。翌宝暦十三年(1763)春、序文を完成し、それを平洲に送り返した。平洲は次の詩をもって、玉山に感謝の意をささげた。

秋玉山見序拙集賦謝(秋玉山が拙集に序せらるるを賦して謝す)

十載論心依旧盟　　十載の論心　旧盟に依り
狂疎領得臭蘭情　　狂疎　領し得たり　臭蘭の情
裁来独負三都賦　　裁し来たり独り負う　三都の賦
序罷長分一代名　　序し罷めて長く分ちたり　一代の名¹⁹

(『嚶鳴館遺稿』卷之二)

「三都賦」とは中国西晋の文学者、左思が魏吳蜀三国の首都を題材にして、十年の歳月をかけて完成した作品である。完成当初は世人の批判を浴びたが、当時の文壇の大御所である張華にこれを見せると、張華は班固の「兩都賦」や張衡の「二京賦」に匹敵する傑作だと激賞し、無名の左思に名士の手を借りることを勧めた。左思が名士

¹⁸ 同上書、451頁。

¹⁹ 高瀬代次郎編、前掲書、346頁。

の皇甫謐に序文を書いてもらおうと、「三都賦」の名声は大いに高まり、以前批判した者たちも手のひらを返して褒め称えたという。人々が競って「三都賦」を筆写したため、洛陽城内の紙の値段が高騰したという逸話は、後に「洛陽の紙価を高からしむ」の故事となった。

この詩には、「あの時の誓いがあったからこそ、十年間も理想を語り合ってきた。狂おしいほど気ままに振舞ってはいても、諒解してくださり、意気投合して同じ理想を求めている。先生と同じ「あっぱれ一代の名」を分け与えてくださったのである。」と詠じている。

七、哀悼の詩と同伝の約

熊本藩に帰った玉山は、翌年、宝暦十三年（1763）病床に臥し、十二月十一日に、六十二歳で歿した。翌年の桜の咲く頃、訃報を手にした平洲は、心友の玉山の死を悼み、次の「哭秋玉山三首」を作った。

哭秋玉山三首（秋玉山を哭す 三首）

其一（其の一）

夢裏音容黯不舒 夢裏の音容 黯として舒びず
西窓落月意躊躇 西窓の落月 意 躊躇す
春雲万里蘇山色 春雲 万里 蘇山の色
号哭無由駕素車 号哭するも素車に駕るに由無し²⁰

（『嚶鳴館遺稿』 卷之二）

夢の中でお会いした先生のお声もお姿も暗く痛ましかった。西の窓に差し込む月影も先生の面影を思い出せて、わたしの心も晴れやらない。先生のお国は春雲たなびく万里のかなたにある。いかに泣き叫ぼうとも、江戸と阿蘇と、こんなに離れてはお見送りすることができないのである。

其二（其の二）

草堂曾別一樽中 草堂 曾て別れたり一樽の中
握手偏期馬首東 握手して偏えに期したり馬首の東するを

²⁰ 同上書、347頁。

豈料今年花樹下 豈に料らんや 今年花樹の下
回頭落日泣春風 回頭 落日 春風に泣く²¹

(『嚶鳴館遺稿』 卷之二)

粗末なわたしの家で、別れの酒宴をした。握手してお別れし、馬を東へ向けて出府してこられるのを待っていたのに、どうしたことだろうか、今年は花の咲く木の下に立ち尽くしている。夕日の沈み行くまで、先生の来てくださる西の方を今か今かと振り返り見る。いつまでも暖かい春風の中で先生のご恩の数々を思い出して、わたしは涙を流していただけである。

其三 (其の三)

一世文名老益賢 一世の文名 老いて益ます賢なりき
幾年交道倚忘年 幾年の交道か 忘年に倚れるは
高山流水従君逝 高山流水 君に従いて逝けば
断絶陽春白雪絃 断絶す 陽春白雪の絃を²²

(『嚶鳴館遺稿』 卷之二)

高山流水は中国春秋時代、琴の名手であった伯牙が、高い山を思いながら演奏したところ、親友の鍾子期は「まるであの高い泰山が目前にあるようだ」と評し、川の流れを思いうかべながら演奏したところ、「まるで滔々と流れる大河が目前にあるようだ」と評した故事から、妙なる音楽のことを「高山流水」と言う。陽春白雪は、中国戦国時代、宋玉の「対楚王問」に、「下里巴人」という曲には、和して歌う者が多かったが、「陽春白雪」には、ともに歌える者が少なかったとある故事に由来して、高尚な歌曲の意である。当代一流の文人である秋山先生は、年老いてますます高く尊崇される。何年の付き合いでまったく年齢の差など感じさせないお方であった。詩文を通して、自分の心をよく理解してくれた忘年の心友の玉山が亡くなった後、高山流水の妙な音楽も共に流れ行く。陽春白雪のような曲を奏でる絃も断ち切れてしまった。自分の心の琴の音を理解する人はいなくなったとして、陽春白雪のような曲を奏でる絃を切ってしまったと詠んでいる。

宝暦元年(1751)、平洲と玉山が付き合ってから以後は、前掲の「秋玉山見序拙集賦謝」

²¹ 同上。

²² 同上。

(秋玉山が拙集に序せらるるを賦して謝す)に「十載論心依旧盟」(十載の論心、旧盟に依り)と詠っているように、玉山の参勤に従って、帰国の一年は書簡で、出府の一年は嚶鳴館に集まって心を語り文を論じて、十余年を経たのである。

明和二年五月、玉山歿後三年目、熊本藩の上野伯修は『玉山先生遺稿』の序文の執筆を平洲に依頼した。平洲はその序文の中に「同伝」²³の典故を踏まえて、秋山も平洲と同じ伝記に綴られたい気持ちを伝えたようである。平洲はその同伝の言に報いて、「玉山先生遺稿序」を書いた。

おわりに

友情が文学の大きな主題になっている。友情にまつわる美しい物語がよく語られてきた。友とは何かの問いに、価値観が一致する相手であり、人格陶冶の手助けとなることをまず挙げているように、すぐれた人格や学識徳行が第一義であり、交友もそれに益するものでなければならない。

平洲の「送江肅卿遊京序」(江肅卿が京に遊ぶを送る序)には、「非類不交、非友不親」(に非ずんば交わらず、友に非ずんば親しまず)²⁴と言っている。平洲も儒家の教えのとおり、徳のある者を友とするのである。

玉山の人となりについては、平洲の『小語』²⁵の第59章には二つの記述がある。

まずは「子羽、外柔内剛、有親友²⁶作鬮醜杯者、諸客皆挙、独子羽不敢飲、作詩諷之。」(子羽は、外は柔にして内は剛なり。親友の鬮醜杯を作る者有り。諸客、皆、挙ぐるも、独り子羽のみ敢えて飲まず。詩を作りて之を諷す。)との記録が見られる。

玉山は、外見はおだやかだが、内心は己に厳しい人であった。親しい友人で、しゃれこうべの杯を作った人があった。ほとんどの客はその杯で酒を飲み干していたが、

²³ 宋代の司馬光と范鎮とが意気投合し「吾と子と、生まれては志を同じくし、死するも当に伝を同じくせん。」と誓い合って、二人はそれぞれに伝記を作り、後に死んだ者がその墓に誌することにした。

²⁴ 『嚶鳴館遺稿』巻四、高瀬代次郎編、前掲書、385頁。

²⁵ 『小語』は、細井平洲自身が見聞きした七十人あまりの逸話、人の善言美行を記録する著作である。細井平洲自筆の草稿本が明治期の評論家・徳富蘇峰の成篋堂に所蔵され、大正十一年にその影印本が刊行された。

²⁶ ここでの親友とは高野蘭亭のことである。高野蘭亭は、名を惟馨、字を子式、号を東里、また蘭亭と称する。十七歳で失明、詩人に転向し、服部南郭に兄事して詩作に励み、やがて南郭とともに名声をうたわれるようになる。

玉山だけは、けっして飲もうとしなかった。玉山は「髑髏杯行」²⁷という詩を作ってそのことを批判したのであった。玉山が内に毅然たるものを備えていたことは、藩主細川重賢への諫めを思い合わせてみても、信じてよいであろう。

二つ目の記録は「肥後秋山儀子羽、与余親交十数年、会飲醉語、是非四応、未嘗一聞拒人之言」（肥後の秋山、儀、子羽は、余と親しく交じわる事十数年、会飲して醉語すれば、是非は四応す。未だ嘗て一たび人をむ拒の言をか聞ず）である。玉山が酔っては議論をして、人のよしあし、道理のあるなしを限りなく話し合うのであったが、玉山から人を疎外する言葉を聞いたことは一度もなかったのである。こうした面倒見のよさは、「溫柔敦厚は詩の教なり」という言葉を玉山が体得している人であったと思え、そこに世故にたけ、人情に通じた詩人としての姿がうかがわれる。玉山の面倒見のよさについては、細井平州の「報河士訥」（河士訥に報ず）（『嚶鳴館遺稿』卷之九）にも、「昔者秋玉山、我丈人行也。其人長者而汎愛衆。」（昔者、秋玉山は我が丈人行なり。其の人は長者にして、汎く衆を愛す。）²⁸と語っている。

「天時不如地利、地利不如人和」（天の時地は地の利に如かず。地の利は人の和に如かず。）（『孟子』公孫丑章）という孟子の有名な言葉がある。「天の時」とは時代やタイミングといった天のもたらす幸運で、「地の利」とは地勢の有利さで、「人の和」とは人心の一致をさす。天のもたらす幸運は地勢の有利さには及ばない。地勢の有利さは人心の一致には及ばない。古来より、事を成し得るには、「天の時」「地の利」「人の和」という三つの条件が必要だが、何事かを達成しようとする時、天の時を得ていても、地の利がなければ成就することはできず、地の利を得ていても、人の和がなければ、これもまた、達成することはできない。人の和が何よりも大切なのである。個人にしてみれば、人の和は頼れるパートナーや協力者を持ち、すなわち良い人間関係のことをいう。天の時と地の利は自分の手でコントロールできない要素である。自分の手でコントロールできるのが人の和なのである。それが大きな輪をつくって広がりを持たれば、状況や条件も自然に整ってくる。平洲の一生を見れば、彼は実に恵まれた人間関係を保っていた²⁹。

²⁷ 詳しくは『玉山先生遺稿』卷之九（武藤巖男等編、前掲書）413頁を参照されたい。

²⁸ 高瀬代次郎編、前掲書、495頁。

²⁹ 平洲塾 38「益友と損友」（<http://www.city.tokai.aichi.jp/4664.htm>）を参照。

以上考察してきたように、詩をもって交わりを結ぶ平洲と玉山との交友は、まさしく「小通則以詩相戒、小窮則以詩相勉、索居則以詩相慰、同処則以詩相娛」（小し通するときは則ち詩を以て相戒む。小し窮するときは則ち詩を以て相勉ます。索居しては則ち詩を以て相慰む。同処しては則ち詩を以て相娛ましむ。）³⁰と云ってよかろう。

³⁰ この引用文の出典は白居易（772-846）が親友の元稹（779-831）に宛てる書簡「与元九書」である。

参考文献

- 小野重仔『嚶鳴館遺稿注釈・初編』（愛知県東海市教育委員会、1998年）
- 『嚶鳴館遺稿注釈・文人編』（愛知県東海市教育委員会、2008年）
- 高瀬代次郎編『嚶鳴館詩集』（『平洲全集』所収、191-284頁）東京平洲會藏版、隆文館、1921年
- 『嚶鳴館遺稿』（『平洲全集』所収、285-533頁）東京平洲會藏版、隆文館、1921年
- 武藤巖男編『稿本肥後先哲遺蹟』卷一(普及舎、1894年)
- 武藤巖男等同編『玉山先生遺稿』（『肥後文献叢書』所収、408-515頁）、東京隆文館藏版、1910年
- 『玉山先生詩集』（『肥後文献叢書』所収、359-407頁）、東京隆文館藏版、1910年